



# 土木紀行

## ももすけばし 電力王の足跡と桃介橋

ながのけんき そぐんなぎ そまち  
長野県木曾郡南木曾町

### 電力王・福沢桃介の偉業達成の地

長野県木曾村で雪解け水を集め、一筋の流れとなった木曾川は、岐阜県境の手前で東西へと流れを変え、変化に富んだ景観を呈する。この両県境にまたがる一帯は、電力王と呼ばれた福沢桃介が、壮大な夢を描き、日本の電力業のみならず、広く産業界を発展させるまでのサクセスストーリーの舞台となった場所である。

明治元年（1868）、維新の幕開けとともに生まれた福沢桃介は、慶応義塾大学在学中に福沢諭吉の婿養子となり、卒業後にアメリカへ留学。その



桃介記念館

後、31歳のときに利根川水力電気株式会社の発起人となり、42歳で木曾川での発電事業に着手する。

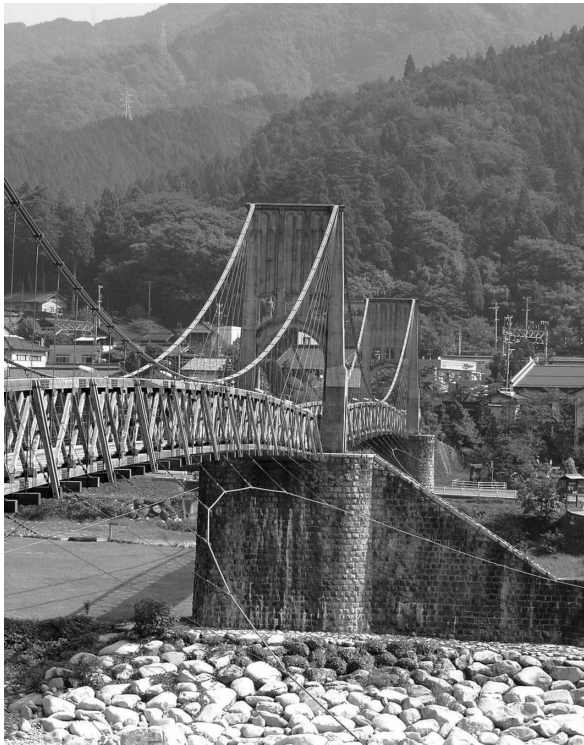
当時は、近代化に向け日本の産業界が一気に加速を遂げた時代で、動力源としての電力への期待も高まりつつあった。そこで、桃介は水量が豊富で落差の大きな木曾川に目を付け、大正8年（1919）に竣工した賤母<sup>しずも</sup>発電所を皮切りに、わずか7年間で七つもの発電所を完成させることとなった。

この発電所や橋は凝った意匠が施され、渓谷に文化の香りを漂わせている。才気あふれる時代の寵児<sup>ちようじ</sup>、桃介が見せるもう一つの横顔は、文化人としての先進性である。

### 渓谷に溶け込むモダンな産業遺産

この一帯で最も目を引くのが、電力王の名を冠

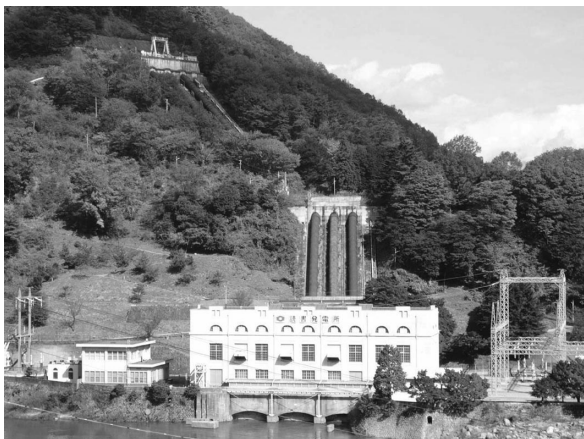




桃介橋 国の重要文化財

全長：247m 幅員：2.7m(全幅4.4m), 主塔：3基  
(石積部分高さ13.0m, コンクリート部分13.3m), 補剛桁：木製

した桃介橋である。この橋は、約2.2kmほど下流にある読書発電所建設の資材運搬路としてトロッコ軌道と併せて架けられた。3本の主塔と木製補剛トラスを備えたデザインが印象的で、木製の多径間吊橋としては日本有数の長大橋になる。中央の主塔には石積の大階段があり木曾川の中州に降りられるような親水と景観に配慮した工夫も見ていて楽しい。一時は老朽化による廃橋の危機も



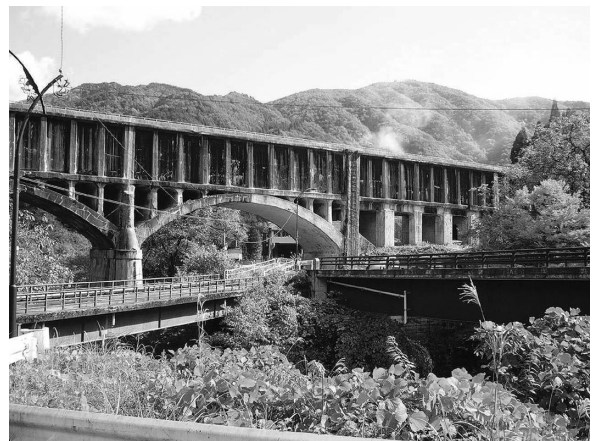
読書発電所 国の重要文化財

あったが、地域住民から保存の声があがり、平成5年に「大正ロマンを偲ぶ桃介記念公園整備事業」の一環として復元し国の重要文化財に指定され、生活道路として活躍する現役の橋だ。

桃介橋の下流には、桃介が大正12年(1923)に完成された読書発電所が姿を現す。水路式発電所として完成当時は国内最大出力を誇った。半円形の窓やレリーフをしつらえた本館は文化的価値が認められ、平成6年に国の重要文化財に指定。これは発電施設として、また稼働中の施設としては初の指定となった。

同時に指定された柿其<sup>かきぞれ</sup>水路橋は、桃介橋から5kmほど上流の柿其川に架かるコンクリートの迫力あるアーチ橋で、上部に水路をわたしている。読書発電所へ水を運ぶために造られ、現存する第二次世界大戦前の水路橋の中では最大級だとか。

木曾川の流れとアルプスの山々を間近に鑑み、桃介の足跡を辿れば、自然の力を借りて人間が生かされていること、それが現在社会や産業史において大きな意味をもっていることに改めて気付かせる。



柿其水路橋

国の重要文化財。全長142.4m, 中央部は2連アーチ橋, 両端部は桁橋。読書発電所への導水路。

【問い合わせ】

国土交通省中部地方整備局企画部企画課